

『アドヴァンス・サロン』一九八〇年十月（ADE研究会）

## 巻頭寸言 豊かな社会・貧困なビジョン

編集子

日本が豊かな社会になったということは、もう誰も否定し得ない事実のようである。九〇%までが中産階級意識をもっているとすれば、まことに結構である。だが、それがそのまま、日本の社会の発展につながっていると錯覚することは、どうもできないような気がする。だから、豊かな社会が、そのままおめでたいことだとすると、本当におめでたくなってしまうのではないか。

アメリカのリースマン教授が二十年前に、この豊かな社会が一步前進するためには、それを導くに足る社会的ビジョンが必要ではないかという提案をしている。人類は貧困からの脱出に長い間努力してきた結果、ここに到達したが、その延長では、社会そのものが生きがいを失ってしまうのではないかというのである。

つまり、無限に物質的豊かさを追求することはできないだろうというのである。豊かになっただけの大きな夢を描かなければ、人間は墮落するのではないかという。

私もそう思うのである。最近の日本では指導者が腐敗墮落して、庶民が無気力になっているという現象が顕著のようである。みんなが天下泰平気分にはたっている間に、病根がいたるところに浸透しているのではないだろうか。経済大国の庶民は、それらしい雄大なビジョンを描いて、新たな社会をつくりあげる努力をすることがなくてはなるまい。うかうかしてはおれないのだ。